

第148 スタジオ夜話

「Audio」について語る？

☆ はじめに

前回お話したように今回から番外編「サウンドドラマ制作」から通常のスタジオ夜話に戻ります。「サウンドドラマ制作」はまた機会をみてお話しします。さてスタジオ夜話ですが毎回冒頭の「☆はじめに」では季節にちなんだお話を少しだけしています。

最近では異常気象の話ばかりになってしまっています。それだけ酷いということですね。昔 NHK のラジオ番組で「ひるのいこい」という番組がありました。今でも放送は続いているようで超長寿番組です。古関裕而作曲のテーマ曲で始まるスタイルは変わらず、聴取者皆さんから頂いた地方の様々な季節のお便りを、紹介する番組です。かつては農業や漁業にまつわるお話が中心でした。

民放なら農林水産省や総務省が提供しているような番組でした。さしずめスタジオ夜話的には、「近年珍しくサンマが豊漁です。脂の乗った大ぶりのサンマがお手頃価格で味わえます。宮城県仙台市でも根室で水揚げされたサンマが入荷し、仙台水産遠海部のお話では「奇跡のサンマ」と言えるくらい大きいサイズのものだそうです。視聴者の皆様、季節の味を楽しんでお過ごしください。」といったところでしょう。アナウンサーの読む原稿は非常にわかりやすく、放送原稿のお手本のようなものでした。

放送作家の横山隆治氏を書いていました。横山氏の著書には放送台本についての解説が掲載されています。放送に携わるアナウンサーの方や作家さんは是非一読してみたいかがででしょうか、本当に参考になります。さて今回のスタジオ夜話、そもそもスタジオ夜話は音に係ることを中心に展開するお話をということでしたので今回は「Au-

dio」についてのお話をします。この「Audio」の世界は魑魅魍魎が割拠する世界です。この世界のお話から始めます。筆者は理解ある編集者や社主に恵まれて FDI の連載を続けています。スポンサーや読者にとってかなり辛口のお話でも今まで叱られたことはありません。今回のお話をご覧になって気分を害される方もいらっしゃると思いますが筆者は忖度はいたしません。お付き合いのほどよろしくお願いします。

☆そもそも「Audio」って何？

軽く辞書を調べてみると「Audio」の定義として「音声・音響の、録音・再生・受信など。また、その装置。」とあります。

音に係る様々な行為やそのための道具のことであるということです。例えば「Audio」を趣味にする。とは音楽を鑑賞することでは無く、音に係る様々な行為やそのための道具を趣味にするということです。以前筆者は LP（レコード）を少ししか持たず何百万円もする Audio 装置を自慢する御仁を批判しましたが「Audio」の定義を正しく解釈するとそれは誤りであり、音楽など鑑賞せず、機械いじりだけでも歴とした「Audio」の趣味人であると理解しました。以前のお話を訂正して謝罪いたします（納得はしていない）。以前から筆者は「良い音」と「好い音」の違いについてお話ししてきました。またどちらかというと「好い音」寄りのお話が多かったように思います。今回は「良い音」寄りのお話をします。そのためにはまずプロ「Audio」と言われる世界について正しく理解する必要があります。「Audio」の定義として「音声・音響の、録音・再生・受信など。また、その装置。」とあります。これにプロという文字が加わると「音声・

音響の、録音・再生・受信など。また、その装置」を生業としていることが前提となります。広義に「プロ」を解釈すれば、プロフェッショナルとは専門的な知識やスキル、責任感と倫理観を持って仕事に取り組み、生業を単なるお金稼ぎの手段だけとはしていない。顧客や社会に貢献する人のことあります。今回はそうしたことを踏まえてのお話しになります。

☆そもそも「Pro-Audio」って何？

かつて 1888 年に電波の存在が明らかになり、1890 年代にそれが通信技術に応用され、その後軍事技術や商業利用されたことはご存じのことと思います。「アマチュア無線」はこの時に誕生しました。はじめはアマチュアもプロも区別は無かったのですが 1900 年を過ぎると、各国とも軍事技術や商業利用を目的とすることを基本とすれば「アマチュア無線」を野放しにするわけにもいかず法制化が必要となり、8 か国で電波監理の方向に進んで行きました。プロとアマチュアの線引きでした。（アメリカは不参加）詳細はここではお話しませんが「アマチュア無線」に興味のある方は調べてみるのも面白いでしょう。さてここで「Pro-Audio」のお話しになるのですが、そもそも「アマチュア Audio」というものは存在しません。「Audio」の世界でははじめからアマチュアもプロも区別は無かったのです。ではいつからプロとアマチュアの線引きが行われるようになったのでしょうか？筆者は現在でも「Audio」の世界にはアマチュアもプロも区別は無いと断言します。それは「Audio」の世界にプロとして携わるのか、あるいはアマチュアとして携わるかの違いであって「Audio」の世界そ

のものにはその区別は無いということです。「Audio」の世界は各国が揃って法制化する必要はないのです。国で「Audio」監理の方向に進む必要もない世界なのです。ではどうして「Pro-Audio」なの？それは高度成長のさなかレコード会社やオーディオメーカーは売上を大きく伸ばしました。放送業界もラジオからTV、白黒からカラーへと発展？して行きます。その時にその事業に携わる様々な人達がいました。「Audio」関連のメーカー人、レコード関連業界人、などです。その発展する歴史の中で更なる発展を期待して、より利益の上がる。あるいは業界の既得権益（少しオーバーな表現）を守る？・・・向上させるために「Pro-Audio」という本来無い線引きを行ない高級志向を煽ったのです。

差別化することによって新しい価値観をつくる今時のマーケティングと同じ手法です。「アマチュア無線」の世界にも機材はどこ製のものでなければダメだという方もいますが「Audio」の世界とは少し違うような？気がします。一概には語れませんが少なくとも「アマチュア無線」の世界では、たとえばアマチュアであろうが電圧、電流、電力、やLOGの計算などは当たり前でできます。「Pro-Audio」の世界ではそんな当たり前前の計算すら怪しい輩が多く、またやたら「Pro-Audio」「Pro-Audio」と吠えています。

現在のオーディオ機器のほとんどが高性能でありそれが安価なものであっても本当の意味でのプロは適材適所で利用しています。またそういう方は「Pro-Audio」「Pro-Audio」と語りません。かつては制作されたコンテンツの音質、画質の問題は現在あまり問題視されなくなりました。当たり前です。TVがNTSCの時代ならともか

く現在ではスマホで4K動画が撮影できる時代です。スマホで「Pro-Audio」の時代がもうそこにあるのです。「Audio」の世界にプロとして携わるのか、あるいはアマチュアとして携わるかの違いの問題であって、機材や機器をそこで論じないでいただきたいと筆者は思います。

☆そもそも「Pro-資格」って何？

音に携わる仕事には資格は必要ありません！！有ると就職の際に有利になる資格はあるようです。筆者は何も持っていません。有ると有利？かな資格には、舞台機構調整技能士（国家資格）、サウンドレコーディング技術認定試験、Pro Tools 技術認定試験、映像音響処理技術者資格認定試験などがあります。いずれも筆者的には業界の既得権益（少しオーバーな表現）を守る？向上？させるためのものに思えてなりません。資格を持った人よりも優れたサウンドレコーディング技術者は数多くいます。音響関係の方ではありませんが大庭三郎氏をご存じでしょうか大庭三郎氏は舞台照明家で有名な人物です。日本照明家協会会長も務めました。紫綬褒章や芸術祭文部大臣賞なども受賞している方で大御所と呼ばれた方です。たぶん舞台機構調整技能士（国家資格）は持っていないと思いま。本人から資格を取ったという話を聞いたこともありません。いずれにしろ資格はプロとして優れているかの判断基準にはならないといえます。調理師免許が無くともお寿司は握れます。プロとしてお寿司を握るためには資格は何もいらぬのと一緒です。すし店を営むには食品衛生責任者の資格が必要となりますが1日の講習で主婦でも取得できます。筆者もアマチュアですが持っています。何でも

かんでも「Pro」「Pro」というのはいい加減にやめませんか。と思うのです・・・。

「Pro-資格」で持っているに役に立つものは第二種電気工事士です。第二種電気工事士は、男性・女性を問わず、独学で十分に合格を目指せます。試験には特別な受験資格が必要なく、年齢や学歴、実務経験に関係なく誰でも受験できるのが大きな魅力です。家庭や職場でコンセントなどの配線工事をすることがあります。実はその配線工事をするには国家資格が必要なのです。簡単なものなら問題ないと思うかもしれませんが、後日その工事が原因の火災が起きたりすると問題となります。音響技術者が現場で電気工事するにはこの第二種電気工事士の資格が必要なのです。仕事以外のDIYでも屋内配線工事などには必要です。前述の4資格の取得を考える以前にこの資格は取っておいた方が良いと思います。その他にも通信関連工事資格などもあります。あまり必要は無いと思います。読者皆様この機会にご一考ください。

☆次回は

音は何でも生「Live」が良いのか？音楽演奏「Live」の魅力とは？スタジオ夜話的に辛口でお話します。まだしばらくの間暑い日が続くようですが読者皆様には健康的に過ごしていただきたいと思っております。お身体をご自愛ください。次回もスタジオ夜話よろしく願いいたします。